

—大阪大学— NewsLetter



大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

NO. 73

Quarterly
Magazine
Autumn
2016



Cover Feature

第8回全国大学生お笑い選手権大会
お笑いD-1 グランプリ 2016 優勝
「阪大生漫才コンビ B国紳士」

President's Special Interview

特別対談：村木厚子氏 × 西尾章治郎総長
「いま個性は性を超える」

学生漫才日本一の阪大生コンビ その名は「B国紳士」

《B-Koku Gentlemen》

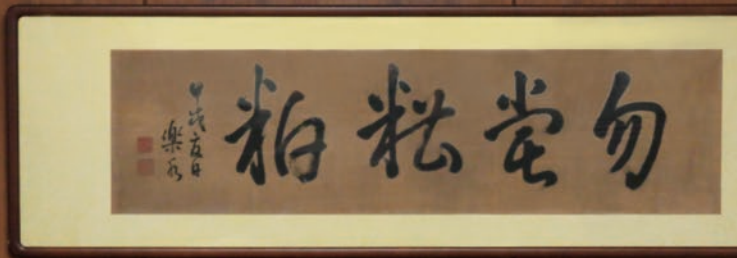


B国紳士

理学部数学科4年の下井竜太郎さん、外国語学部ロシア語専攻3年の山内優範さんの漫才コンビ。結成3年目。今年3月に開催された「第8回全国大学生お笑い選手権大会～お笑いD-1グランプリ2016」で優勝し、全国の大学生漫才の頂点に立った。コンビ名の由来は英国（えいこく→A国）紳士から。「Aにはひとつ何か足りない。どこか抜けているからB」と笑う大阪大学落語研究部出身の2人は今、真剣にプロの漫才師を目指している。（13ページにインタビュー記事を掲載）







いま個性は 性を超える

- 元厚生労働事務次官
大阪大学男女協働推進センター招へい教授
村木 厚子 — Atsuko Muraki
- 総長
西尾章治郎 — Shojiro Nishio

多様な構成員がいきいきと活躍できる ダイバーシティ環境の実現をめざして

大阪大学は現在、構成員一人ひとりが、どのようなライフステージにおいても個性と能力を発揮できる職場・研究環境の充実を最重要課題としている。「いま、なぜダイバーシティが求められているのか」。元厚生労働事務次官で、大阪大学招へい教授の村木厚子氏と、大阪大学西尾章治郎総長が、男女協働と障がい者支援の新しいかたちについて語り合った。

▼ワークライフバランスの実現へ

西尾 本年4月1日から女性活躍推進法が施行され、本学でも「大阪大学男女協働推進宣言」の公表とともに、「男女協働推進センター」を設立しました。同センターの招へい教授にご就任いただきました村木

さんから、本日は、大阪大学の男女協働をはじめとするダイバーシティ環境の構築をさらに前進させていくためのヒントやアイデアをお伺いしたく、どうぞよろしくお願ひいたします。



村木 G20 (20か国財務大臣・中央銀行総裁会議)などの国際会議に出席していると、「inclusive growth」がキーワードになっていて、女性はもちろん、障がい者も含めた多様な人たちのパワーを引き出すダイバーシティ環境の実現が、世界の重要課題であると感じています。その意味で、大阪大学に、教育、研究、就業のあらゆる場面で男女協働を実現し

ようとするセンターが設立されたことで西尾総長の意気込みを感じます。
西尾 私は、「大阪大学男女協働推進宣言」で、三つの柱からなる「男女協働推進アクションプラン」を全学的に推進することを宣言しました。目指しているのは、①教育・研究・就業と家庭生活を両立できるワークライフバランスの実現、②どのようなライフステージにあっても構成員一人ひとりがキャリアアップできるシステムの構築、③性別、国籍、障がいや性的指向などに関わらず活躍できる環境を実現するための構成員の意識改革です。

村木 おっしゃる通りですね。これまでは、育児などの“ライフ”のために「休める」制度の充実を図ってきましたが、今後は、“ワーク”の側面、つまり育児をしながら継続してキャリアを積んでいける働き方改革が重要になります。

西尾 大阪大学には、「研究支援員制度」があります。これは、大学院生をはじめとする研究支援員が、育児や介護を抱えている研究者の研究活動を支援する制度で、途切れることなく研究を継続できる制度になっています。研究支援員に男子学生が参画していることも特筆すべきことだと思っています。また、私は、総長就任後、大学の意思決定に関わる役職者の女性比率を20%以上とし、理事、監事、管理職にも女性の登用を積極的に進めています。

村木 それは見事な数値ですね。女性の登用に関しては、お試して怖々というケースが多いのですが、思い切って数値(女性比率)をあげてしまったほうが成功する確率が高いと思います。

西尾 2019年度末までに、新たに雇用する教員は全体数の30%を女性にしたいと考えています。比率の低い理工系の女性教員についても、



25%という数値を掲げています。企業とのクロスアポイントメント(研究者が大学等の公的研究機関と企業の両方に身分を持つ)制度を先導的に推進するなど工夫を重ねて、この目標をぜひとも達成しようと考えています。キャンパス内に女性教員・研究者が相当な割合でいることで、学内の多様性が適度なバランスで保たれるとともに、新しい刺激と意欲が生まれ、大学の活性化に繋がると考えています。

村木 確かに、女性の比率が20～30%を超えると、まるで半分以上女性がいるように見えてきて組織の雰囲気が変わり、組織全体に活力が生まれると思います。

西尾 男女協働が真に実現するためには、意識改革や広報活動も重要と考えています。

村木 男女雇用機会均等法が制定(1985年)された当時、法律の理念を広報するため労働省(現厚生労働省)の省内で標語を募集しました。採用されたのが、入省したばかりの女性職員が提案した「いま個性は性を超える」です。これには皆、ものすごく賛同しました。それから30年以上たちましたが、これを超える標語は生まれていないように思います。

西尾 なるほど、いいフレーズですね。ぜひこの対談のタイトルにこれを掲げたいと思います。女性のことばかり取り上げてきましたが、私は、男性の育児休暇取得の推進も大きな課題だと思っています。大阪大学でも取得する男性教職員はほとんどいません。抵抗感という取得しづらい空気があるように思います。男性の育児休暇は自然という職場環境を醸成していくことも大事ですね。

村木 実はいま、厚生労働省である試みを実施しています。毎月、子どもが生まれた男性職員とその上司を大臣室に呼んで、育児休暇の取

得を大臣自らが促しているのです。これが功を奏するかどうか私は注目しています。

▼障がいや介護を越えて活躍できる環境作りへ

西尾 ダイバーシティ環境の実現では、障がい者との協働も大きな課題です。大阪大学には、2008年から通称「エコ・レンジャー」と呼ばれる障がい者雇用対策チーム(知的障がい者・身体障がい者の雇用に取り組む組織)所属の職員がキャンパス内をクリーンにする仕事に就いています。特に、炎天下や真冬に戸外で活動を行う姿には頭が下がる思いです。私としてはもっと多様な活動、例えばアートや創作の面などで、個性や隠れた能力を引き出せるような新たな方向性はないものかと模索しているところです。

村木 リーマンショック以降、雇用環境が悪化し、多くの障がい者が解雇されるという事態に陥りました。そのような状況のなか、大阪では、知的障がい者に対してインターンシップをはじめました。これを国の制度に取り入れて、3か月のトライアル雇用の制度を作りました。3か月たてば解雇されてしまうのではないかとという大方の予想を裏切って、約8～9割近い人がそのまま正規雇用されました。共に働くことで障がい者に対する認識が大きく変化したのです。大阪には、知的障がい者によるコンビニの運営や、現代アートに才能を発揮する知的障がい者の育成など質の高い素晴らしい取り組みがたくさんありますね。

西尾 近年、介護の問題も非常に深刻になってきています。これについてはどういう工夫が考えられますでしょうか？

村木 介護は長期戦ですから、これに耐えられるように、残業がなく短い時間で働ける制度や、仕事を「ちよくちよく休める」柔軟な休暇制度が必要だと思います。男性が介護に携わる場合には、相談相手がないことが多いので、一人ひとりの状況を丁寧に見守る体制づくりも重要です。介護離職をなくするための環境づくりは地域を巻き込んで行うことも必要ですので、今後、産官学連携の研究テーマにもなるのではないかと思います。

西尾 大阪大学がダイバーシティ環境を充実させ、性別、国籍、障がいや性的指向等の有無にかかわらず、多様な構成員が個性を尊重され活躍するための包括的な支援を実行するため、今日の村木さんのお話をぜひ活かしていきたいと思います。

村木 ダイバーシティ環境が実現できる第一の条件は、トップのリーダーシップであると思っています。本日の対談を通して、大阪大学の今後が大いに期待できると確信しました。招へい教授としてお役にたてればとてもうれしく思います。

西尾 本日はお忙しい中、大変ありがとうございました。構成員一人ひとりの個性が輝く環境づくりに率先して取り組んでいきますので、今後とも大阪大学へのご支援をよろしくお願ひいたします。

■村木厚子(むらき あつこ)氏
大阪大学男女協働推進センター招へい教授。高知大学文理学部経済学科卒業後、1978年に労働省(のちの厚生労働省)に入省。大臣官房政策評価審議官、大臣官房審議官(雇用均等・児童家庭担当)、雇用均等・児童家庭局長、内閣府政策統括官(共生社会政策担当)、厚生労働省社会・援護局長等を歴任、女性では16年ぶり2人目の厚生労働事務次官を務めた。2016年6月より伊藤忠商事株式会社社外取締役就任。

■西尾章治郎(にしお しょうじろう)
1975年京都大学工学部卒業、80年同大学院工学研究科博士後期課程修了(工学博士)。京都大学工学部助手、カナダ・ウォータールー大学客員研究助教授、大阪大学基礎工学部助教授、情報処理教育センター助教授を経て、92年同工学部教授。大阪大学サイバーメディアセンター長(初代)、同大学院情報科学研究科教授、同研究科長、大阪大学総長補佐、2007年～11年同理事・副学長。13年同サイバーメディアセンター長。15年8月から現職。専門はデータ工学。



「新たな社会調査」で 若者の心に迫る

— 昭和～平成の意識変化を明らかに —



● 人間科学研究科 教授
吉川 徹 — Toru Kikkawa

吉川徹教授を代表とする研究グループは、2015年、メディアなどによる世論調査とは異なる特性を持つ大規模な学術社会調査・SSP調査 (Stratification and Social Psychology / 階層と社会意識全国調査) を実施。蓄積された過去のデータと比較することで、これからの日本社会を構成する若年層の「社会の心」の変容の兆しを明らかにした。

◎タブレットPCによる社会調査は世界初

吉川教授の専門は「調査計量」。入念な設計による社会調査と高度な解析技術により、今を生きる日本人の意識や考え方を数的根拠により明らかにする。昨年行われた第1回SSP調査では、全国の自治体に申請し、選挙人名簿もしくは住民基本台帳から20歳から64歳までの総計9000人を選出。訪問調査員による精密な面接調査を実施した。

今回使用したのは、社会調査の分野で長く用いられてきた紙(質問紙)と鉛筆ではなく、タブレット型PC。訪問を受けた調査対象者は、調査員

とともにタブレットPCの画面を確認しながら回答を直接入力していく。これは「世界で初めての先駆的な試み」と吉川教授。

調査ツールをタブレットPCに変更した理由を、「在宅率の低下などにより調査票の回収



CAPI法(タブレットPCを用いた面接法)による訪問調査のイメージ図

率が非常に下がっている現状があります。個人情報を提供することへの不安も大きい。タブレットPCへの直接入力なら、質問紙方式とは異なり、情報が他人の目にさらされる心配がなく機密性が高まる。データの集計作業や解析、保存も容易になります」と説明する。

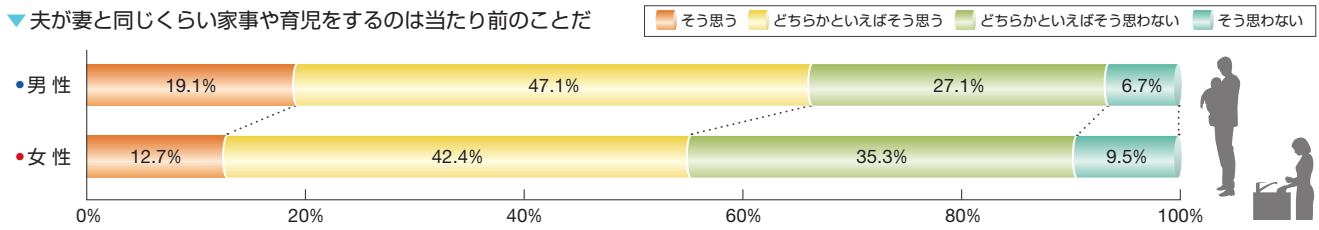
◎人口ピラミッドを考慮した調査設計

若年層に着目した設計も今回のSSP調査の大きな特徴だ。「少子化が進む日本では、団塊世代や団塊ジュニアなどと比較して20～30代の人口規模が小さく、従来の設計では、その層の動向が把握できませんでした。日本社会の心の変化をいち早く捉え、日本が今後どのような方向に進むのかを見極めるため、現役で社会を支える、昭和の終わりから平成生まれの人たちの声を抽出できるよう工夫を施しました」

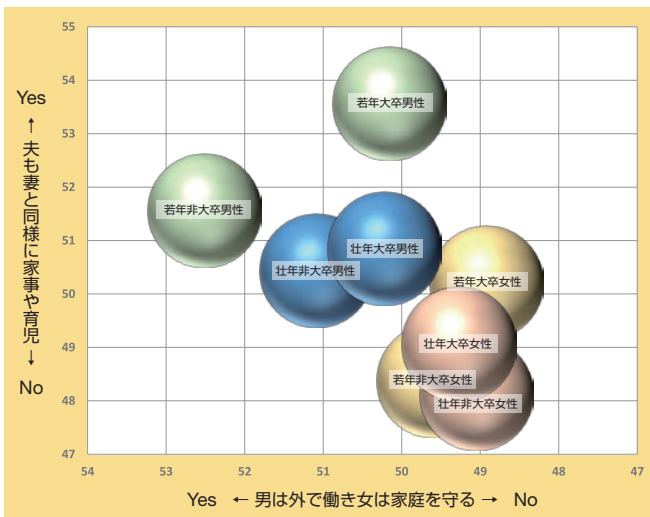
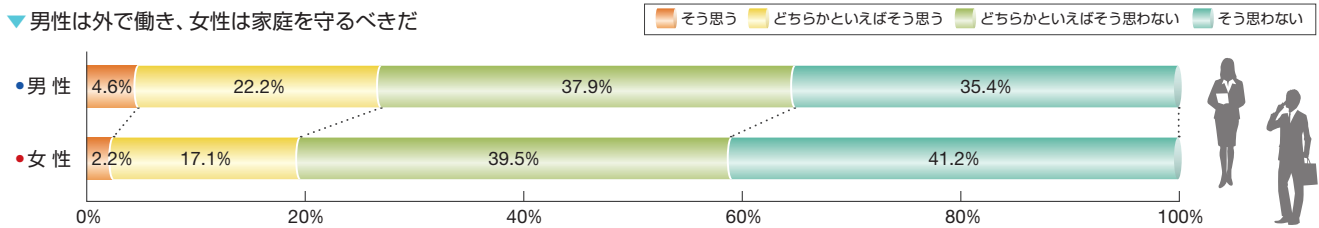
その工夫のひとつが、今の日本人にとって関心が高い、格差・ジェンダー・教育などに関する新しい質問を設定したこと。社会調査では、これまで蓄積されてきた10年・20年前のデータと比較できることが重要であるため、「従来どおりの定点観測的な質問と、日本社会の最新の論点に関する質問を半数ずつ提示しました」と語る。

SSP調査：「イクメン意識」に関する解析結果

▼夫が妻と同じくらい家事や育児をするのは当たり前のことだ



▼男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ



また、紙と鉛筆による社会調査が戦後70年間続けられてきたため、調査ツールや記録方法をデジタル化することで回答に微妙な影響が出ないよう、タブレットPCのサイズや入力画面のレイアウトなどハード面・ソフト面で試行錯誤を繰り返した。その結果、「ここを掘り下げれば、いろいろな事象や社会意識が見えてくるはずだ」という幾つかのキーワードをたぐり寄せることができました」と自信を見せる。

●意外な「イクメン意識」も判明

吉川教授が特に驚いたのは、「イクメン意識」に関する解析結果だった。日本人男性は家事・育児に携わる時間が極めて短く、それが女性の社会参画などを阻む要因と一般に言われる。しかし、「データを分析すると、『夫が妻と同じくらい家事や育児をするのは当たり前』と考える人は女性より男性でむしろ多い。男性は仕事も家事も両方したいと考えている一方で、若い女性は、一般に思われているほど男性の家事・育児参加を強く望んでいないという結果が出ました。若年層の女性の保守化や専業主婦願望が言われますが、実際に意識が変化してきており、40～50代の女性との大きな世代差が明確になりました」。他にも「職場で働きぶりが認められていない」、「他人に追い越されそうな不安を強く感じている」など、これまでは見えてこなかった若年層の心や、報道な

どで伝えられていた印象論が統計的の数値データによって証明された。

これらの分析結果は、団塊の世代など日本の中核だった世代が退きつつある現在、何が社会の真の課題なのかをはっきりと示しており、今後の政策立案などにも役立つ貴重な基本データとなる。「例えば今、男性の家事・育児参加が進めば少子化などが解決するように考えられていますが、本当にそうか。今回の結果を踏まえて、国民の『標準的な考え方』を正確な数値を根拠に世の中にわかりやすく伝え、当事者に響く政策立案に繋げていくことが使命だと考えています」

●最新ニーズに合う調査システムの開発へ

今後の目標は「正確な大規模調査を続けていくためにも、未来を担う若い人たちの最新のニーズに合うような調査システムを開発していきたい。新しいことをするだけなら誰にでもできますが、私は、10年間隔の調査の継続性を維持しながら、慎重に少しずつ改革していきたい」と話す。さらに、「SSP調査のような長期的視点による社会調査とは別に、震災前と震災後といったような短期的な切り口でも、自分たちが生きている社会の心の動きを調べ、わかりやすく発表していきたいですね」と意欲を語る。

今年6月には、単著である『現代日本の「社会の心」計量社会意識論／有斐閣』を英訳した「Social Mentality in Contemporary Japan」が大阪大学出版会から刊行され、世界に向けて発信された。「日本の社会意識の変遷に関する解析が、発展を続ける東アジア諸国の未来設計に役立てばと考えています」

常に多忙な吉川教授だが、論文の執筆などに行き詰まった時の対処法はテニス。「大阪大学在学中に立ち上げたテニスサークルの顧問も務めています。最近では体力維持のため万博公園の外周道路を走っていて、近隣のフルマラソン大会にも出場しています」と日焼けした顔をほころばせた。

●吉川 徹(きっかわ とおる)
1994年大阪大学大学院人間科学研究科修了。94年大阪大学人間科学部助手、95年静岡大学人文学部講師、96年助教授。2000年より大阪大学人間科学研究科助教授。准教授を経て14年から現職。専門分野は計量社会意識論、社会調査。

◀マラソンの完走証。フルマラソンのタイムは4時間をきる

経験が人生をかえる

—「国の架け橋」になる仕事とは—

●外務省経済局政策課 課長補佐
原 琴乃 — Kotonno Hara

■「絵本」「リード役」子供時代から片鱗

小学校時代から絵を描くのが大好きで、9歳で絵本を出版した。主人公のうさぎが、自分の大事なハンカチを、次々やってくる子鳥たちに分け与えるストーリー。「発展途上国の開発支援に関心がありますが、子どもの頃に既に、誰かと共有したり、支援したりということに興味があったのかも」と振り返る。中学、高校時代は、運動会の合同ダンスや文化祭の演劇の監督などを務めた。伊勢志摩サミットでも、関係省庁やG7諸国の意見や要望をとりまとめる役。「昔からしきるのが好きなのかな」と笑う。

■阪大で学んだ、提言する価値

阪大では国際公共政策研究科(OSIPP)に進学。「公共政策は、提言してこそ価値がある学問。現象を分析して解釈を述べるだけではなく、だからこそこう行動すべきとまで言えるところに魅力を感じました」と語る。OSIPPでは議論の場が多く、「意見を強く主張する人が議論をリードできるものと思っていましたが、人の意見を聞く力がすごく大事だと気づきました。いろいろな立場を踏まえて妥協案や折衷案を出せる人が、実は議論をリードできるのは、国際社会の議論と全く一緒」と指摘する。

■「アフリカの少女の言葉」が外交官を志すきっかけ

開発支援に関心をもつきっかけにもなった忘れられない言葉がある。イギリスに交換留学していた際、「将来何になりたい?」と問われたアフリカの少女が、「大人になりたい」と答えた。「日本の小学生が夢見のお花屋さん・先生・お医者さんなど、どんな職業に就きたいのかではなく、生きること自体が目標だと。ショックでした」

また、国際機関で働くキャリアを目指して、OSIPPの前期課程修了後に大学院留学したフランスにおいて、日本とフランスの大手企業の連携を円滑に進める仕事に携わった。開発支援だけではなく、二つの国の架け橋になる面白さも実感し、日本人として、国のため、そして国際社会のために仕事ができる外交官になりたいとの思いが募り、外務省に入った。

■失敗・成功、どれも無駄になっていない

好きな言葉は「意志あるところに道は開ける」。大阪大学の後輩たちには「大学院でたくさんのお会いがあった。そこから得られるアドバイスや、失敗や成功も含めた経験は、どれも無駄になっていない。すべての出会いや経験に、『ありがとう』と感謝しながら、前に進んでいくことが重要だと思います」とメールを送る。



「人の意見を聞く力がすごく大事です」

●OB・OG訪問

阪大経由、世界行き

—伊勢志摩サミットで卒業生が活躍—



- ▲ネームホルダーに今も光る伊勢志摩サミットのバッジ
- ◆伊勢志摩で開催されたG7。「G7の価値・結束、世界経済」を議題とした第1セッション

●原 琴乃(はら このの)氏
2002年大阪大学国際公共政策研究科修士課程、11年同博士課程修了、博士号取得。05年外務省入省。発展途上国のODAプロジェクトや東京五輪招致活動、欧州外交などの担当を経て、昨年8月から現職。03年パリ第1大学・第9大学でMBA取得。

機 関 情 報

■外務省
(東京都千代田区霞が関2-2-1)

外務省は、東京霞が関にある外務本省と、世界各地に置かれている在外公館で構成されている。大臣官房及び全省的なとりまとめを行う事務局の総合外交政策局を除く局は、地域別担当の5つの地域局(アジア大洋州、北米、中南米、欧州、中東アフリカ)と事項別担当の4つの機能局(経済、国際協力、国際法、領事)に分かれており、また情報収集分析を行う国際情報統括官が置かれている。外務本省に約2,550人、在外公館に約3,450名の職員が働く(外務省ホームページより)。大阪大学卒業生は142人。
ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/index.html>



▲外務省の在外研修として留学したケンブリッジ大学院の修了式で



「走る目標ができたなら、
躊躇せずに一生懸命走ればいい」

宮錦達史

5月に開催された主要7カ国(G7)首脳会議(伊勢志摩サミット)で、首脳の補佐役「シェルパ」*チームのメンバーだった原琴乃さんと宮錦達史さん。いずれも国際公共政策研究科(OSIPP)出身だ。今年のG7サミットの議長国として、日本ならではの議題設定、関係省庁・各国スタッフとの調整・交渉の末、世界に向けてメッセージを発信する大仕事をこなし、た2人は、「OSIPPで学んだ経験が今に生きている」と口をそろえる。

*シェルパ…ヒマラヤ登山の案内者に例えて、サミット(山の頂上の意味)で首脳の補佐役として、通常、シェルパの下、4~10人のチームで議題の調整などをする。アジア唯一のG7メンバーとして、G7だからこそ率直に議論できる日本ならではの議題を設定、関係省庁や各国スタッフのハブとなって調整を行い、国際社会に向けた宣言をまとめる。シェルパには幅広い分野を理解し、国を代表して首脳を支え、即座に対応できるスピード感と決断力が求められる。



◀大学院学位授与式で学位記を手にご両親と

●宮錦達史(みやき たつし)氏
2009年大阪大学国際公共政策研究科修士課程修了。同年外務省入省。
対中外交を担当し、在中国日本大使館で大使秘書などを歴任。今年1月から現職。

外務省で生きる、阪大の学び

—学び続け、人生を豊かに—

●外務省経済局政策課 課長補佐
宮錦達史 — Tatsuhi Miyaki

■英語と世界史が「世界への興味」の原点

子どもの頃はやんちゃなサッカー少年だったが、中学、高校時代は「低迷期」だった。高校では意欲的に勉強する気にならず、サッカー部も辞めた。「勉強も楽しくなく、何をしたらいいのか分からなくて。自分探しでしたね」と、アルバイトをしながらCDやレコードを買いあさる生活を振り返る。ただ、英語と世界史は好きだった。世界への興味は芽生えていて、思い返せば外交官になろうとした原点だったのかもしれない。

■阪大で「考えの柱」を得る

国際関係学科がある神戸市外国語大学に進学。4年生の時、シンガポールに1年間留学した。留学で勉強の楽しさを知り、帰国後も勉強を続けた。意欲にかられ、国際公共政策研究科(OSIPP)に進学した。「OSIPPで勉強の場を与えてもらい、すごい吸収をした2年間でした。経済学的思考を身につけることができましたと思います。物事を考える際の基になる柱ができて、すごく自信になりました。専門性を身につけることで、いろいろな面に応用できます」と語る。OSIPPを修了して研究者になった友人らと今も連絡を取っているといい、「研究者と話していると面白いですね。公務員とは違う世界の研究者と、今もつながってられるのは財産です」

■外務省の職員に魅せられ

国家公務員試験に合格後、官庁訪問で出会った外務省の職員らに魅せられた。「日本の将来や夢を熱く語っている姿に感動しました」。入省後は、対中外交を中心に携わってきた。「政策を立案するに当たっては、立場によって様々な視点や考えがありますが、外務省としては『日本としては何が正しいのか』と考えます。特に最近では、国益を考え、実際の政策決定を行う資料にそれを盛り込めるようになり、やりがいを感じています」

■目標めかけ、学び走り続ける大切さ

好きな言葉は、江戸時代の儒学者、佐藤一斎の「^{ちか}少くして学べば、即ち壯にして為すことあり。壯にして学べば、即ち老いて衰えず。老いて学べば、即ち死して朽ちず」

「ずっと学び続けることが、人生を豊かにする、という意味です」と説明する。大阪大学の後輩たちには、「私は学び始めるのが遅かったが、遅すぎることはない。人生は1回きり。結果として回り道でもそれも勉強、何か走る目標ができたなら、躊躇せずに一生懸命走ればいいと思います」とアドバイスを送る。

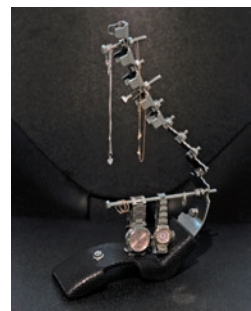
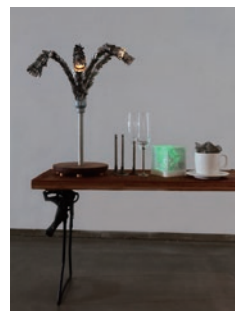


e-square(吹田キャンパス)にて

企業×阪大の
画期的な授業

ものづくりの流れを学ぶ「実学主義」

大阪大学の高度副プログラム「実学主義」は、企業と大学が協働する実践型教育プログラム。大学院で学ぶ理論が、社会の現場でどのように活用され、そのために今後、何をどう追究していく必要があるのか、実践を通じ体感的に理解することが目的。受講生は、企業が派遣した講師による講義を受け、企業のリアルな“現場”を見学して各部署の担当者から直接話を聞いて学ぶ。今年度も約50名の大学院生が受講している。



▲端材をアップサイクルした開発商品

大学院等高度副プログラム (37のプログラム)

自分の専攻に関連する、あるいはそれ以外の分野の内容を体系的に学ぶことにより、複眼的視野と学際的・俯瞰的な視点を獲得するプログラム

実学主義 ～企業の視点で科学する～

- 製品企画：発想の源を探る
- 製品開発：商品アイデアを練る
- 製品開発：ニーズ調査と発想法を学ぶ
- 製品開発：プログラミングと制御を学ぶ
- 製品開発：先端技術開発現場体験
- 製品評価：測ることで見える製品アイデアへのフィードバック



e-square
entrepreneurship × education

▼大学院生がプロとマンツーマンで製品を創出



▲濱田 格雄 特任講師

「実学主義」のプログラムが開講したのは2013年。未来の科学技術アントレプレナー（起業家）の育成に取り組む産学連携本部の「e-square/吹田キャンパス」で、協力企業と密接に連携した独自講座が実施されている。産学連携本部は、科学技術アントレプレナーの育成を目指し、企業と共同研究や委託研究を進めてきた。「その実績を基盤に、主に大学院生を対象として誕生した全学的教育プログラムです」と濱田格雄特任講師。

企業における製品開発の流れを強く意識した構成となっており、「製品企画」、「製品開発」、「製品評価」がプログラムの柱。「製品企画」では、発想の源やニーズを発掘するためのインタビューなど、情報収集のためのスキルやコミュニケーション力を身につける。「製品開発」では、



▲発表をみつめる企業の開発担当者の目は真剣で、質疑応答では鋭い質問がとぶ
 ◀「製品開発」講座の最終発表会では、企業の開発担当者の前で商品企画のプレゼンを行う

アイデアを練りあげ、実際の販売をめざした商品開発や、ニーズ調査・発想を学んだ上でのビジネスプラン作成にチャレンジする。そして最後の「製品評価」では、工場などから出る端材のアップサイクル[※]に取り組み、実際のものづくりを体験する。「例えば製品評価の講座では、一人の受講生に一人のクリエイター（協力企業から派遣）が付き、プロと一対一の体制で商品を完成させていく。これは『実学主義』を象徴する特徴的な講座だと思います」

※アップサイクル…工場から出る端材にデザインを加えることで付加価値を与え、商品として蘇らせること。

▼異分野融合教育で、大学院生に「企業マインド」を

「実学主義」は、主専攻の教育課程以外の内容を学ぶ高度副プログラムとして位置づけられ、大学院課程の期間中に、開講されている6講座の中から4講座を履修すると、高度副プログラムの修了証が授与される。個別の講座のみの受講や、学部生の受講（単位取得は不可）も認められている。また「測定装置や計算機の基礎知識が求められるプログラミング系の講座以外は、文系大学院生も十分に理解でき楽しめる内容。製品開発などでは、むしろ文系の受講生がリードするケースが多い」と濱田講師は笑う。

受講生に期待することは、「社会に有益な科学技術を生み出そうとするマインド、何でもやってみようという精神、より良いものを探求していく姿勢を身につけてほしい。e-squareは、3Dプリンターやレーザー加工機などの最新機器を備え、試作品が作れる環境も整っている。そのため、ものづくりに対するハードルが下がったという受講生も沢山います。また、所属するラボでの研究活動や行事と両立させるためのタイムマネジメントなどを通じて社会人基礎力を身につけ、社会で困難に見舞われた時にも自ら対処して前に進める突破力のある人材に育ててほしい」。自分の専門とは異なる多分野の大学院生との交流により刺激を受け、受講生同士のネットワークも広がりつつあるという。


「開発途上のプログラムなので、可能性はまだまだ広がっている。今後はラボの研究と融合できるような形を模索し、彼らの専門性も引き出したい。それがこのプログラムを実施する意味でもあると思います」

▼大学にも協力企業にも 意義のある講座として成熟を

協力企業とのさらなる連携も模索している。「企業の問題解決の一助となることを目指しています。講座を通じて受講生は、企業の内部にまで入りこみ、その企業の問題点をしっかりと咀嚼したうえで解決案を提案する。実際に製品づくりの面で協力企業に貢献できた嬉しいケースもあり

ます。『実学主義』はアントレプレナーシップ教育を通じた非常に密接な産学連携です。大学と企業、相互に意義のある講座として成熟させたい」スタートから4年目を迎え、受講生の延べ人数は約200名。修了要件を満たして卒業式で修了証を授与された大学院生は8名。「今後はさらに多くの企業の協力を得て、講座の数を増やしたい。将来的には、講座で発案された優れたアイデアをうまく商品化して、受講生を実際の事業化のスキームに組み込みたい」と大きな目標を語った。

the voice of STUDENT ■ 受講生インタビュー



起業に興味も、新しい自分を発見

● 川崎 愛結美さん
 (工学研究科 生命先端工学専攻 生物工学コース)

所属するラボでは、植物の遺伝子資源を有効活用するための研究・実験に携わっています。社会に役立つものを作りたいという思いが強く、実学主義のプログラムを知って、ぜひ受講したいと思いました。実際にものづくりを体験してみて、人と人のつながりの大事さを知ると同時に、専門が異なる人たちの意外な発想に驚くなど、さまざまな気づきがありました。また自分のアイデアが形になり評価された時は本当に嬉しかったです。

研究職志望でしたが、プログラムを受講して、生物工学系の知識を活かして起業してみたいとも考えるようになりました。大学院生にとってラボのスケジュールとの両立は大変ですが、受講することで世界が広がり、新しい自分を発見できると思います。

the voice of COMPANY ■ 企業担当者の声

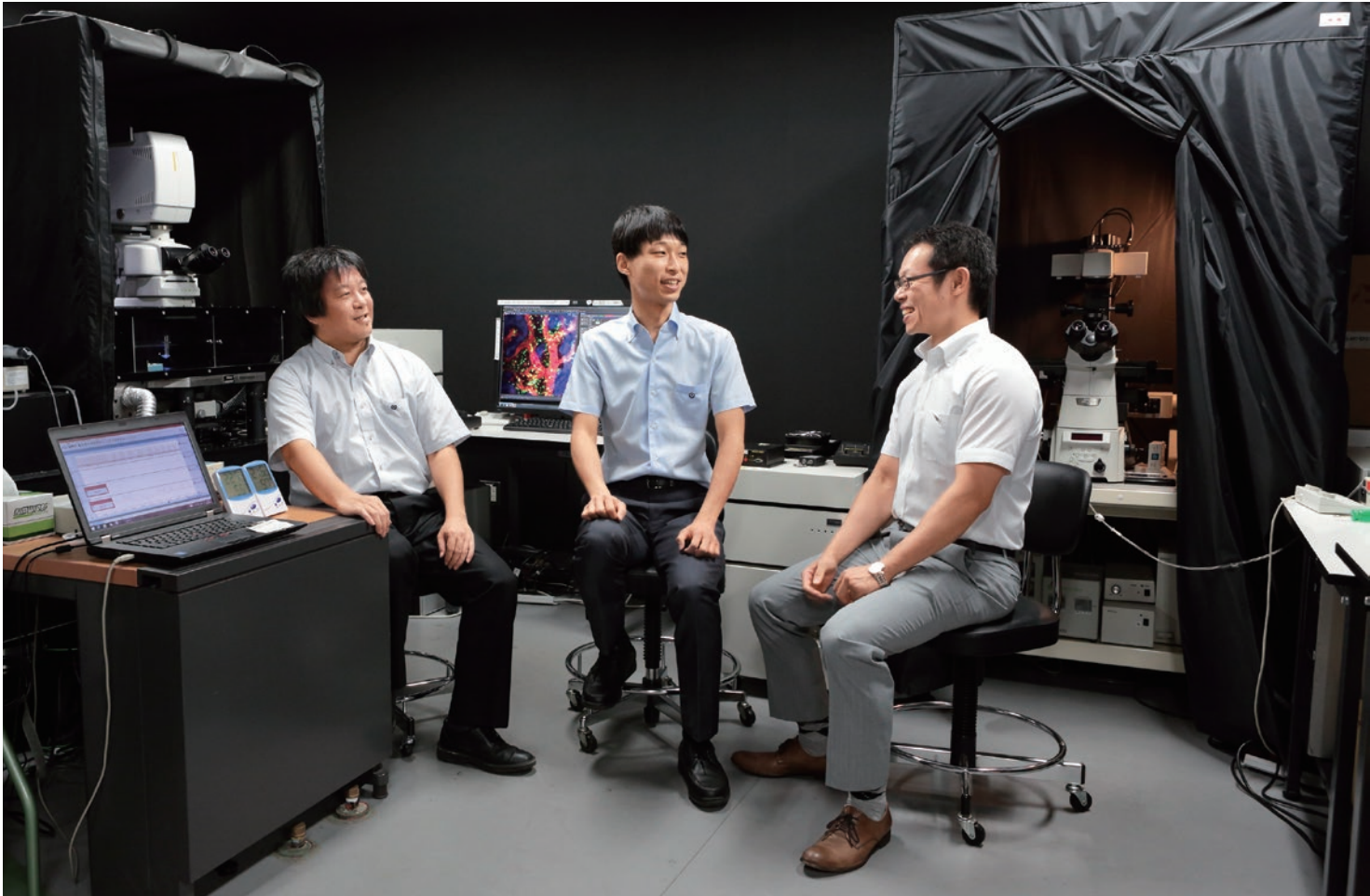


自ら考え行動を起こしゴールに到達できる人材に

● 小山 明男 課長
 (株式会社サンプラテック企画開発部)

弊社は実験器具・機器のメーカーで、実学主義の講座では「製品開発」の講座を担当しています。大切にしているのは、自分のアイデアを商品化していく具体的プロセスを体験してもらうこと。それにより、自ら考え行動を起こしゴールに到達できる人材が育ってほしいですね。商品化に至るまでには様々な壁が立ちますが、受講生の皆さんは悩みながらも、最終報告会では製品の形態まで提案していて感心しました。今後、異なる知識・技術を持つ受講生同士のコミュニケーションがさらに密になれば、製品開発のアイデアもレベルアップしていくと思います。この講座から実際の新商品が誕生し、受講生の自信につながることを期待しています。

■株式会社サンプラテック(大阪市北区同心2-1-3) **SANPLATEC CORP**
 1960年創業。プラスチック製理化学機器の製造販売を行う。2012年に業界で初めて女性研究者向け実験器具カタログ「Platine(プラティヌ)」を発刊。ここ数年はライフサイエンス分野に本格参入しiPS細胞ライブ輸送システム「iP-TEC(アイビーテック)」をリリースし注目を集めている。ホームページ▶<https://www.sanplatec.co.jp/index.asp>



3人の「専門歯車」をかみ合わせ、免疫システムを解明する

●若手の異分野融合研究を支援する「未来知創造プログラム」の採択事業

- 医学系研究科 助教
菊田 順一 — *Jyunichi Kikuta*
- 工学研究科 准教授
堀 雄一郎 — *Yuichiro Hori*
- 情報科学研究科 助教
瀬尾 茂人 — *Shigeto Seno*

大阪大学は、学内の若手研究者(45歳以下3名)によるチャレンジングな異分野融合研究を支援するため、「未来知創造プログラム(平成26~28年度)」を実施。58件の応募から12件のプロジェクトが採択され共同研究が進行している。その1つ、「医工情報の連携による蛍光生体イメージング技術の開発と細胞遊走ダイナミクスの統合的解明」に取り組む、菊田順一助教(医学系研究科)、堀雄一郎准教授(工学研究科)、瀬尾茂人助教(情報科学研究科)のグループに、研究の内容や意義、異分野融合研究のメリットなどについて聞いた。





工学・Engineering

●堀 雄一郎(ほり ゆういちろう)
1999年京都大学薬学部卒業。2004年京都大学大学院薬学研究科博士課程生命薬科学専攻修了、博士(薬学)。ロックフェラー大学博士研究員、大阪大学工学研究科助教を経て、16年同准教授。



医学・Medicine

●菊田 順一(きくた じゅんいち)
2006年大阪大学医学部医学科卒業。13年大阪大学大学院医学系研究科予防環境医学専攻修了、博士(医学)。国立病院機構大阪南医療センター・リウマチ科専修医、日本学術振興会特別研究員を経て、13年大阪大学医学系研究科助教。



情報科学

Information Science and Technology

●瀬尾 茂人(せのお しげと)
2001年大阪大学基礎工学部情報科学科卒業。03年同基礎工学研究科情報数理系修了。06年同情報科学研究科バイオ情報工学専攻修了、博士(情報科学)。情報科学研究科助手を経て、07年同助教。

●免疫細胞の移動を可視化し、解析する研究

「蛍光生体イメージング技術の開発と細胞遊走ダイナミクスの統合的解明」とは、細胞や生体分子を光らせて挙動を可視化し、観察結果を数値化することで、免疫システムの解明や薬効評価につなげようとする研究だ。

免疫細胞(白血球)は骨髄で作られ、全身の血管を介して体内をパトロールしている。そして生体内で感染や炎症が生じると移動の速度を緩め、血管の外に出て炎症・感染部位に向かう。「私たちは、免疫細胞を追跡し、血管壁への接着・浸潤などを識別する方法を開発し、免疫システムの基盤となる細胞遊走の仕組みを解明しようとしています」と、研究代表の菊田順一助教。さらに、「関節リウマチのような自己免疫疾患は未だ原因が不明で、病態解明や治療法の開発には、まず正常な免疫システムを理解する必要があります。緑色蛍光タンパク質(GFP)や化学プローブ分子を使用したライブイメージング技術(生体分子が生きた細胞の中でどのように振る舞うかを可視化する技術)を駆使することで、免疫システムの基盤となる様々な細胞の相互作用に迫ることができます」と研究の意義を語る。

●医学・工学・情報科学をかみ合わせ、研究を効率的に

医学・工学・情報科学という異分野で活躍する3人の研究者が連携したことで、「仮説を立てて生体内を撮影する」「蛍光分子をデザインし観察する」「観察画像を解析し数値化する」という効率的な流れが構築され、研究は順調に進んでいる。

免疫細胞生物学が専門の菊田助教の役割は、「蛍光標識された免疫細胞の動きを見るため、生きた組織内の細胞遊走を動画で撮影し観察すること」。ケミカルバイオロジー(物質生命工学)が専門の堀雄一郎准教授は、体内にある特定の生体分子を光らせる技術(化学プローブ)を開発した。

「選択的に結合し、結合した時だけ光る分子構造などを考え、精密にデザインしていきました」。そして、バイオインフォマティクス(計算機科学を生物学の問題解決に応用する分野)の研究に取り組む瀬尾茂人助教は、細胞の動きを追跡するための画像処理と、データマイニング(ビッグデータをコンピュータで解析し有用な知見を得る)による解析を行った。「動画の場合、人間による目視観察では実験結果の有意性についての判断が難しい。情報技術を駆使し統計処理することで正確な評価が行えました」

●長期的な視野で研究を進める事の大切さ

今回の異分野融合研究の成果について3人は、「個々人が高いレベルの技術を持っていても、学際的な研究は一人では進められません。それぞれの技術を足すのではなく、3人の専門性を歯車のようにかみ合わせたことで研究を前進させることができました」。さらに、「年齢が近いので、お互いに刺激しあえた。自分の知らない分野についても学べました」「自身の専門分野に閉じこもってはいわらないことがある。情報技術についての知識が得られたことも大きな財産」と、共同研究ならではのメリットを語る。

また今回、強いモチベーションとなっているのが最長3年間の研究費助成だという。「若手研究者間の連携や共同研究を対象とした助成・補助金制度は限られており、長期の研究費をいただけたことは非常に嬉しかった。研究は短期間で成果を出すのは難しく、長い目で支援していただくと有り難い」と継続的な支援に期待を示した。

今後については、「私たちのライブイメージング技術は、病態解明だけでなく、既存あるいは開発中の薬剤の作用も評価できる。解析結果を臨床現場に還元することで、患者さんごとの薬剤の使い分けなど個別化医療などにつなげていきたい。未来知創造プログラムが終了しても、3人による共同研究を積極的に進め発展させていきたいですね」と口をそろえる。

D-1グランプリで頂点に 原点は 落語研究部

「第8回全国大学生お笑い選手権大会 お笑いD-1グランプリ2016」で優勝し、学生漫才日本一の栄冠をつかんだ「B国紳士」。ボケ役が下井竜太郎さん、ツッコミ役が山内優範さん。審査員から「ダントツにうまい」と評された学生離れたテンポのいい漫才の原点は、落語研究部（通称「落研」）だった。

◀「第8回全国大学生お笑い選手権大会 お笑いD-1グランプリ2016」の優勝トロフィーと賞状



落研部室にて。「男留（おとめ）」「都（とーます）」は二人の当時の芸名



◆理学部4年 下井竜太郎さん（ボケ役）

▼当初は「想定外」だったコンビ結成

阪大の落研入部が出会ったきっかけ。高校時代からM-1グランプリに出場するなど漫才好きの山内さんは、落語で話芸を磨こうと入部した。一方、下井さんは、お笑いには好きでも人前に立つのが大の苦手。“自己啓発”のために入部し、そして山内さんが募集した相方に真っ先に手を挙げた。

「話したこともないやつが立候補してきて想定外でした」と山内さん。2013年秋にとりあえずコンビを結成した。ところがコンビを組んでみると、「笑いのツボが同じで、意外に相性が良かった。そして漫才するの



が楽しくて、本気で勝負してみようと思うようになった。学生で1番じゃなかったらプロになんかなれない。D-1グランプリは試金石でした」と山内さんは振り返る。

▼落研での経験を生かした芸風に

落研では地域の寄席で高座に上がって、多くの場数を踏んだ。全くウケなかった高座も芸の糧になっている。下井さんは「最初は赤面したり、滑舌が悪くて囁んだりするとメンタルがやられそうでした。でも、人を笑わせた時の気持ちよさは何物にも代え難いですよ」と語る。間の取り方、立て板に水のしゃべくり、わかりやすいボケなど落研での経験を生かし、B国紳士らしい芸風の研究を続けている。

▼ストリート漫才も

言葉ボケを思いつく山内さんがネタを作り、2人でネタ合わせをして完成させる。ネタは約25本になった。お笑いライブに積極



◆外国語学部3年 山内優範さん（ツッコミ役）

的に出演して腕を磨くほか、京都・三条大橋ではストリート漫才も続けている。舞台とはまた違った緊張感のある練習になる。山内さんは、数学科在籍の下井さんのキャラクターを生かした数学ネタも考えている。「でもね、専門の過ぎて（笑）。これや、というものを早く見つけたいです」

▼阪大芸人として

第17回課外活動総長賞特別賞に輝き、西尾章治郎総長から「阪大芸人」を名乗っていいとお墨付きをもらった。「お笑いの本場、大阪を代表する大阪大学なのに、おもしろイメージがないのは残念。僕たちが阪大芸人として活躍して、阪大の知名度アップにつなげたい」

ただ芸の道は厳しい。「もがきながらも挑み続けたい。そして毎日、舞台上に立って人を元気にしたいです」。2人の漫才道はまだ始まったばかりだ。



◀落研時代の寄席の様子
（左）下井竜太郎さん
（右）山内優範さん



ご寄付いただきました皆さまへ

大阪大学未来基金へのご寄付に対しまして、心よりお礼申し上げます。
ご寄付いただきました皆さまへの感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。
引き続き、大阪大学の未来に向けたご支援をよろしくお願い申し上げます。

2016年9月
大阪大学 総長 西尾 章治郎

▼ 2016年5月～2016年7月ご寄付分を掲載 <寄付実績> 4,291,587,685円 / 17,990件 (2016.7.31時点)

◎個人寄付者ご芳名 (敬称略・五十音順) 372名

うち掲載を希望されない方 76名

赤松 展人	大久保英作	菅 恒夫	佐伯 達志	鈴木清太郎	常松 清	中村 隆宏	馬場 貴仁	堀岡 一彦	森川 隆
秋友 直文	大杉 寛	北田 明	佐海 慎三	鈴木 直	土肥 正志	中村 毅彦	浜崎 信介	本多 哲哉	森田 俊雄
秋吉 秀樹	大園 隆一	木寅 真直	榊原 裕二	鈴木 元子	徳島 耕次	中村 充	濱田伊友子	眞下 又蔵	森田 正夫
東 和男	大竹三津男	木野 廣一	坂本 久恵	須多 正人	徳永 真志	中山 真弓	原 明博	益川 和磨	森田 雅和
東 紇子	大谷 光道	木下 久美	坂山 徹	住原 廣	利国 信行	成相 哲朗	原川 健一	増田敬治郎	森安 雅治
穴村 紳一	大西 勇一	木村 厚史	定 道生	曾山 謙三	戸田 祐一	成相 裕之	原田 英幸	榊田 浩司	安田 達哉
天津 泰徳	岡田 弘	木村 和正	佐藤 愛	高田 昌典	登内 宏	名和野 隆	東島 清	松下 文二	山石 勝三
天野 正夫	岡庭 三和	木村 徹	佐藤 眞一	高橋 秀也	豊田 潤一	南平 勝	樋口 良一	松下 保彦	山上義太郎
新井 浩之	岡林 秀和	吉良 貴志	佐藤 大地	高橋 佳文	豊田 眞司	二川 清	人見 聡一	松田 高朋	山崎 圭治
安藤 文彦	岡本 望	楠本 正一	佐藤 智之	田口 和夫	仲 厚吉	西井 幸司	日野 裕一	松村 茂樹	山崎 忠成
伊藤 康高	長永 賢二	熊坂 隆夫	里見 軍之	田口 達也	長井 朗	西浦 充	平尾 成	松本 祥明	山下 勝美
石井 伸也	尾澤 克利	久米 和男	佐野 俊明	竹内 敬介	中井 貞雄	西尾 明修	平田 仁志	真鍋 禮三	山田久仁夫
石川 環	折田 俊哉	栗林 隆志	紫藤 良則	武岡 努	中井 善人	西山 忠志	平田 雅子	丸山 久男	大和谷 厚
泉 善樹	柿本亜弥子	栗原 晶子	篠崎 一雄	多田 芳史	中浦 亨	能智 政光	廣嶋 哲	三浦 公廉	山笠 史雄
泉谷 重裕	蔭山 潔	黒田 善克	芝 良祐	巽 康司	中岡 保夫	野上 由夫	府賀 伸彦	溝口 正	山本 和男
磯畑 重蔵	笠川 泰朗	黒原 英文	柴田 充啓	田中 恭輔	中川 匡夫	野口 進治	深水香津子	南 好子	行田 史朗
板谷 雅雄	鍛冶野安弘	花倉 満	島田 真吾	田中 昭二	中川義太郎	野崎 秀之	福岡 秀和	南垣内功一	横井 弘昌
井上 謙一	梶本 佳孝	小泉 邦昭	島本 恭次	田辺 雄一	仲座 方利	野崎 裕道	福島 透	三宅 正治	横島啓太郎
井上 光	片岡 宏介	幸田さちみ	嶋谷 薫	谷 和信	中島 國凱	野田 隆明	福田 公子	宮野 知行	吉居 清
井上 幸弘	片岡 千鶴	古志 猛	城山 巖夫	谷 宗彦	中島 謙	野中 誠一	福原 卓也	Miron Ionut Mihai	吉田 六男
今仲 行一	片岡 幹雄	小林 栄三	白井 久男	谷垣 武	中島 成	野嶋 範昭	福原 正樹	村井 健	吉村 學
井寄 将博	片山 房一	小林 捷平	白井 良明	谷川 雅則	永田 行代	橋本 正孝	藤井 敏男	村岡 孝男	米永 國照
入江 正一	金子 茂男	小林志津子	白井 紀行	谷口 研二	中田 彬史	長谷 吉二	藤澤 哲郎	村上 兼一	米山 信夫
岩谷 邦夫	兼子 忠彦	小林 保	白國 紀行	種子 眞一	長門 正彦	長谷川 保	藤田 武良	村上 典正	若林 崇
上田 一雄	金田 嘉行	小松 督	白杉 祥二	田畑 雅朗	中西 利明	長谷川善信	藤本 多聞	村上 英樹	若林 東人
上田 和光	金花 芳則	小森 望充	新井 理	田村 明男	中西 信子	秦 公樹	淵端 孟	村田 清	渡辺 一弘
上野 祥樹	鎌野 昭一	齊藤 精久	菅原 啓祐	田村 進一	長原 一成	秦 英夫	古田トシ子	女鹿田直之	
上野 喜彦	川崎 清隆	齋藤 弘樹	杉生 眞人	千葉 伸一	長弘 行雄	畑山 直勝	星野 哲也	木谷 昌史	
植松 克吉	川崎幸千代	齋藤 雅之	杉野 学	丁野 恵子	永峰 潤	服部 建一	堀井 秀夫	元江 正史	
衛藤 愧一	川島 祥一	齋藤 良介	鈴木 淳彦	都築 利行	中村 清美	花岡 睦子	堀池 讓立	森岡 博	

◎法人寄付者ご芳名 (敬称略・五十音順) 11団体

うち掲載を希望されない団体 2団体

一般財団法人恵済団	一般社団法人高石市医師会	株式会社ポッカクリエイト	日本ケロッグ合同会社	和光電研株式会社
一般社団法人生産技術振興協会	株式会社カネカ	ダイキン工業株式会社	有限会社後藤書店	

◎教職員寄付者ご芳名 (敬称略・五十音順) 80名

うち掲載を希望されない方 21名

青島 貞人	内田儀一郎	尾上 孝雄	栗本 英世	貫川浩一郎	高嶋 康人	中野 貴志	深井 明	村田 雪美	山根 聡
明石 満	宇都宮 裕	片山 光浩	小門 典夫	篠原 厚	田谷 正仁	中村 春木	藤井 英俊	森 雅志	吉川 秀樹
足立 博行	大竹 文雄	狩野 裕	小巻 善郎	菅 哲男	塚常 健太	中村 麻貴	牧本 清子	森原 一郎	吉田富士江
伊藤 利道	大野 英子	河原 充	近藤 滋	杉山 昌章	床谷 文雄	西尾章治郎	増田 敏裕	山内 和人	柴木 宏実
井上 裕滋	大原 智	河原 源太	佐藤 尚弘	関山 明	中西里恵子	西川 宏	松宮 孝明	山口 進康	李 鍾國
岩谷 好和	奥山 雅則	木村 正	ジェー コク	節原 裕一	仲野 和彦	花垣 和則	南 二三吉	山中 卓	

大阪大学未来基金のご案内

大阪大学では、学術研究や教育・人材育成を目的とする「大阪大学未来基金」を設けております。
大阪大学の未来を支えるため、企業、団体、個人のみなさまからのご支援をお願い申し上げます。

【ホームページは [大阪大学未来基金](http://www.miraikikin.osaka-u.ac.jp) で 検索 www.miraikikin.osaka-u.ac.jp】

未来基金についてのお問い合わせは、大阪大学渉外本部未来基金事務局までご連絡をお願いいたします。

【大阪大学渉外本部未来基金事務局】 TEL:06-6879-8327 FAX:06-6879-4337 e-mail:kikin@office.osaka-u.ac.jp

受賞・表彰
Awards and Recognition

🏆 第14回産学官連携功労者表彰



産学官
連携功労者表彰

〈授与機関〉内閣府

企業、大学等の産学官連携活動で大きな成果を収める・先導的な取組を行う等産学官連携活動の推進に多大な貢献をした優れた成功事例の功績を称える

【厚生労働大臣賞】

医学系研究科 教授 澤 芳樹
医学系研究科 特任教授(常勤) 宮川 繁
●重症心不全に対する再生医療製品
—自己筋芽細胞シート「ハートシート®」—の
開発に係る産学官連携

【日本経済団体連合会会長賞】

工学研究科 特任准教授(常勤) 塚原 保徳
●「マイクロ波を利用した製造プロセス」の
開発に係る産学官連携

🏆 大学発ベンチャー表彰2016 ~Award for Academic Startups~



〈授与機関〉科学技術振興機構

大学等の成果を活用して起業した大学発ベンチャーで今後の活躍が期待される優れた大学発ベンチャーを表彰し特にその成長に寄与した大学や企業等を表彰する

【文部科学大臣賞】

医学系研究科 寄附講座教授 森下 竜一
●医薬品、化粧品等の開発を行う㈱ファンペップに対し
共同で機能性ペプチド研究を行い、大学発のイノベーションを支援

【大学発ベンチャー表彰特別賞】

歯学研究科 教授 前田 芳信
●㈱アイキャットに対し研究開発支援、製品の臨床評価を実施し、
大学発のイノベーションを支援

※両名とも受賞企業の支援大学として表彰

イベント告知
Event Information

阪大ファミリーの集い



大阪大学・大阪外国語大学の卒業生、
教職員OB・OG、学生・教職員の皆さん！
懐かしい集いで一年を締めくくりませんか。

【日 時】12月3日(土)
【会 場】学士会館
(東京都千代田区神田錦町3-28)
※臨時託児室を設置します
【講演会】15:00～
・西尾章治郎 大阪大学総長
…挨拶 活動報告
・熊谷 信昭 大阪大学同窓会連合会会長
…大阪大学同窓会連合会へ挨拶



〈卒業生による講演〉
・豊島 浩二氏 [1985年工学部卒]
トヨタ自動車株式会社
Mid-size Vehicle Company MSZ ZF
プリウス開発責任者(チーフエンジニア)

【懇談会】16:40～
【会 費】3,000円(学生以下は割引あり)
詳細は大阪大学ホームページをご覧ください。



8月20日(土)、岡山で初開催した「大阪大学の集い」には約170名が参加。
地域や年代を超えた交流の輪が広がりました。

豊中キャンパス 秋の学祭



今年で57回目の開催となる『まちかね祭』。
阪大生による模擬店、ステージ企画や
音楽バトル「まちかねソニック」など
趣向を凝らした企画が盛りだくさん。
秋の豊中キャンパスでお待ちしています。

【日 時】11月4日(金)～6日(日)
10:00～19:00
【場 所】大阪大学豊中キャンパス
【特別企画】まちかねソニックなど、特別企画も開催します。
※当日は公共交通機関をご利用してお越しください。
詳細はホームページをご覧ください。
URL ▶ <http://machikanesai.com/>



大阪大学・豊中キャンパス
紅葉のプロムナード

◎バックナンバーは、大阪大学ホームページ www.osaka-u.ac.jp からご覧いただけます。

●大阪大学ニュースレターへのご意見、お問い合わせがありましたら、Eメールで受け付けております。E-mail: newsletter@ml.office.osaka-u.ac.jp